

六部堂の歴史的環境

遠部 慎

島根大学 山陰研究センター
onbe@facility.hokudai.ac.jp

Historical Environment in Rokubudo

Shin Onbe

San'in Research Center, Shimane university

Keywords: Rokujyu-Rokubu, Memorial Tower, Archaeological Research, Hearing Survey, Custom

要約

愛媛県中予地域山間部の久万高原町六部堂という地名がある。三坂峠から東温市に抜ける六部堂越えと言う呼称で知られる通り、登山者等にはよく知られている。江戸時代に造立された六十六部廻国供養塔がその由来とされるが、不明な部分が多く、それにまつわるフィールド調査および聞き取り調査を行った。それらを基にして、既存の記録や考古学的な記録と統合化し、その歴史的環境を明らかにした。その結果、六十六部廻国供養塔の設立が一貫してシンボリックな意義を有していたこと、遍路を含めた複雑な様相が存在することがわかった。

序

愛媛県中予地域の久万高原町に六部堂という地名がある。江戸時代に造立された六十六部塔（山之内 1974）がその由来とされるが、六十六部廻国供養塔は、紀年銘があるものが全国に数千基以上存在し、中世以降の信仰形態を考えるうえで重要な資料となっている。六十六部（六部）とは、法華経を書写し、全国六十六箇所神社仏閣をめぐる、その法華経を奉納する行脚僧をいう。それらに関連して造立された供養塔は、現在でも地域で根強く信仰されているものも存在する。愛媛県における六十六部の納経所は久万高原町大宝寺（稲田 2013）が該当し、『予陽郡郷里諺集』にも納経についての記載があり（註1）、本地域における六十六部にまつわる基礎的な研究は急務といえる。

土佐街道および遍路道の周辺に、六十六部廻国供養塔が建立されることはよく知られている（武田 2012）。これまで六部堂に関する基礎的調査は行われたことがなく、塔の所在する地名が「六部堂」という通り、それに関する地名として現在まで伝わっている可能性が高く、六十六部廻国供養塔に関する習俗等についても何らかの手掛かりが得ら

れるものと考えられた。ところで、愛媛県内の六十六部に関する習俗の聞き取りは、西海賢二（1987）などによって行われているものの、きわめて低調と言える。そのため、中予地域山間部の街道沿いに存在する六十六部廻国供養塔の現代までつながる習俗をはじめ、歴史的環境を明らかにすることは、四国遍路との関係を含め、きわめて意義が深いものと考えられた。そこで、フィールドワークを兼ねた、習俗に関する聞き取り調査を行い、その結果について報告し、考察を加える。

1. 分析対象と研究方法

本研究で分析対象とするのは、久万高原町東明神字六部堂に所在する、六十六部廻国供養塔とその周辺である（図1）。標高は720m。旧国道33号線土佐街道沿いに面し、現在周辺は水田となっている。皿ヶ嶺に登山する際のコースの1つとしても、六部堂越などと呼ばれるコースになっている。この六十六部廻国供養塔の地名などに関する文献的な記述だが、江戸時代の『久万山手鑑』、1818（文政2）年「西明神村絵図」、1872（明治5）年『伊予国地理図誌』、1925（大正14）年の『上浮穴案内』などにもみられない。文献記録が少ない中、具体的に六部堂について、記述した主な文献について以下に取り上げておきたい。

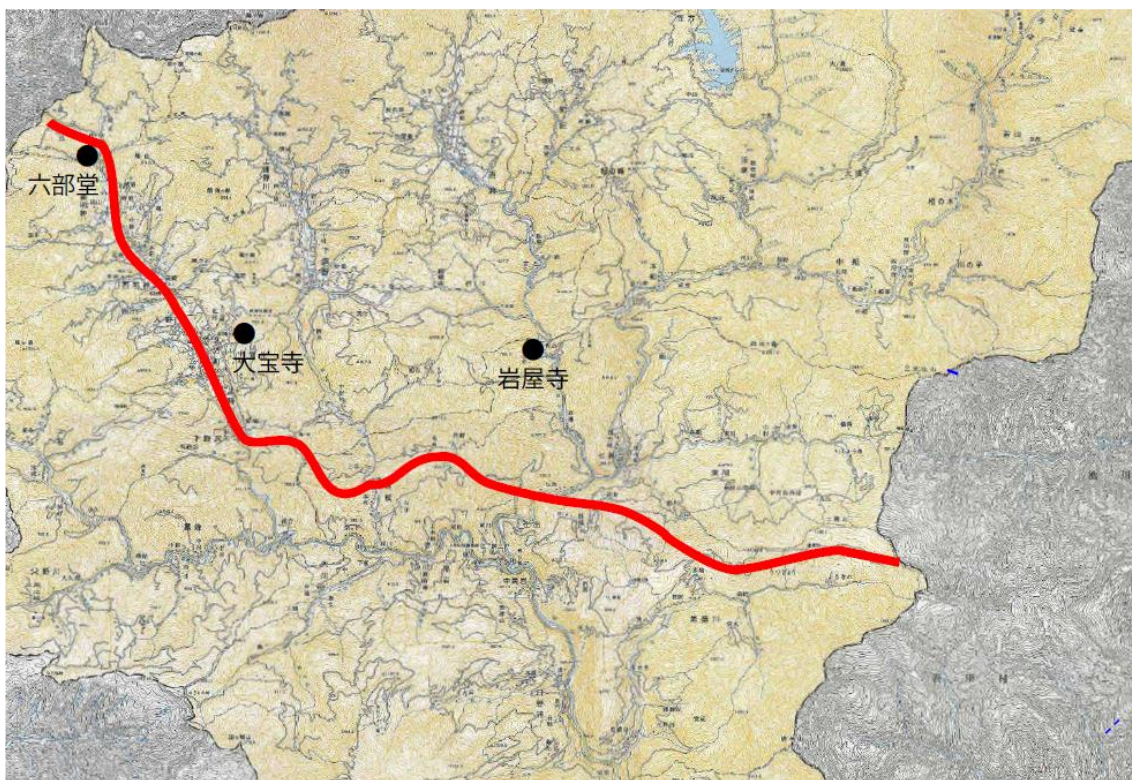


図1 六部堂位置図（国土地理院久万1/25000をもとに作成：太線は土佐街道）

野口光敏 1972 年「交通」

畑野川地区の交通についてまとめているが、その際に「下畑野川地区➡上畑野川地区➡六部堂越➡六部堂➡三坂峠➡坂本」のルートが示され、へんろ道として「久万中組➡大宝寺➡下畑野川河合➡岩屋寺➡下畑野川河合➡千本峠➡高殿」と「久万中組➡大宝寺➡下畑野川河合➡岩屋寺➡下畑野川河合➡上畑野川➡六部堂」が示されている。

伊藤義一 1973 年 a「埋れた土佐道」

「向かって左には刻銘しれぬ墓石があるので、或は信仰心の篤い光厳大徳は回国の途次、ここで死去し、同業の妻と娘が埋葬して、その志を記した供養塔を建てたものかと思われる。百五十年前の土佐道はこの供養塔の前を通っていたのではないかと想像される。そうだとすれば三坂の遍路道からここへ、さらにこの谷合を下って六里石を見通すと、やはり今の 33 号線の道と重なってくるのである」

伊藤義一 1973 年 b「埋れた土佐道・その後」

松山在住と考えられる方（八十八翁）からの私信をもとに「久留米回国僧の供養塔は土佐道に沿うものではなく、ここから六部堂・もみの木峠を越えて重信町上林へ出る街道に沿ったものだったらしい」と見解を修正している。

山之内肇 1974 年「旧久万山街道を行く」

「更には道は川の流に添って南下すると、縦の木川との合流点近くに来る。道端に小さな「塚」がある。部落の人たちは六部塚と呼んだ。徳川時代の昔、全国を行脚した山伏という修験者が此の地にて生涯を終った。そして作ったのが此の六部塚なのである。其の為此の地方を「六部堂」と言（ママ）う地名になっている」

和田純一 1979 年「久万の遍路道とその周辺」

「六部さんの前には、可愛いチマキが三本供えてあった。傍の碑に、次のような銘文が掘られていた。天下泰平 九州筑後 久留米 奉納神社仏閣日本回国供養塔 日月清明 照空光厳大徳 六部さんの前から遍路道は下りとなり、川に向かって下りていく行くと小さな木橋があった。渡ると道は寸断されていて、判らなくなった。仕方なく田んぼの畔を歩いて川岸の方へ行く、細い旧道が伸びているのを発見した。川伝いに右折する。川床が岩石ばかりの小さい滝に出た。黒い川底の岩とは対照に、紅葉の新緑が輝いて見えた。おそらく、昔の遍路さん達も、ここに来て、この美しい流れを眺めたことであろう。苦労して歩いてきた者のみが味わう、よろこびである」

山内譲ほか 1995 年「街道の確定と現状」

「供養塔は、六部堂のバス停あたりで国道から久万に向かって右方向に少し坂を下った水田の中に建てられている。他の遍路墓などに比べて高さ 140cm にもなる立派な石が使われていて、銘文も鮮明である。銘文によると「照空光厳大徳」なる人物が文政八年（1825）7 月日本廻国の途次にこの地で倒れ、同行していた妻と娘が埋葬して、墓の傍らにこの供養塔を建てたことがわかる。目印として植えられている杉の木などから判断して、この供養塔は移動していないと考えられる。もしそうであるとすると、旧街道

からは離れすぎていて、むしろ今の国道筋が旧街道であったと考える方がつじつまが合う。しかしこれについては、六部堂のところから土佐街道から分岐して、樫の木峠を越えて現在の重信町方面に向かう道があったことを考慮に入れば、整合的に理解することができる。つまり、供養塔は土佐街道沿いではなく、そこから分岐して重信方面に街道沿いに建てられたのである」

喜代吉栄徳 2002 年「回国碑の謎七」

「妻娘を連れての回国修行であった。僧名は生前に発心した時につけたものであろう。しかし、なぜ僧侶になって妻子をつれてまで修行の旅に出たのかわからない。本当の仏道修行であったのか。あるいは故郷出奔、逃走の同行であったか。業病ゆえの旅なのかも知れない。理由はどうであれ、妻子に石塔を残すだけの余裕があった。その後回国を続行成就して帰郷したものか。見知らぬ土地に埋没したものか。家族連れではあるがいわゆる天蓋六部とは違った存在に感じる」

久万高原遊山会 2011 年「街道の確定と現状」

「藪こぎを続けて、小川の左側を下ると、文政八年の供養塔の前に出る。(中略)ここで死去した人物が同行の妻と娘が埋葬して、夫(父)の志を記して供養したものと読み取れる」

西口武志 2011 年「官道と土佐街道」

「おそらく旧街道はやはり今の三三号線に沿って通じていたのだろうと推定する。それはここから約1キロ下った「六部堂」のバス停前の小道を少しおりた所にある供養塔の文面である。ここには年古りた十数本の杉の群立ちがあり、その前の僅かな平地を利用して、文政八年(一八二五)九州久留米の有徳者、照空光厳大徳の神社仏閣巡拝の供養塔があつて(中略)、向かって左には刻銘知れぬ墓石があるので、或は信仰心の篤い光厳大徳は回国の途次、ここで死去同行の妻と娘が埋葬して、その志を記した供養塔を立てたものかと思われる。二百年ほど前の土佐街道はこの供養塔の前を通じていたのではないかと想像される。そうだとすれば三坂の遍路道からここへ、さらにこの谷合いを下って六里石を見通すと、やはり今の三三号線の道と重なってくるのである。」

管見にふれた六部堂に関する記述について記載した。以上のような状況から、文政8(1826)年に造立された六十六部廻国供養塔は、妻子とともに廻国六十六部を行った久留米の廻国僧が亡くなったことを契機に建てられ、地名の由来となり(山之内 1974)、土佐街道から分岐したもの(山内ほか 1995)ないしは土佐街道沿い(西口 2011)と、とらえられていることがわかる。

また六部堂に関する基本的な情報も少なく、西海(1987)が広見町大字中野川の例で示したように、フィールド調査及び民俗学的な聞き取りから、六部堂周辺の歴史的環境に関する手掛かりが得られる可能性が高い。そこで、本研究ではまず六十六部廻国供養塔及びその周辺に存在する石造物等の基礎的情報を整理し、その年代的な把握を行う。

さらに、聞き取り調査（小倉務）を基にした記録を加え、六部堂周辺の歴史的環境について時系列に整理することで、六十六部廻国供養塔をめぐる現在までの状況を明らかにする。

2. 六十六部廻国供養塔とその周辺の現地調査

墓石類は、3基存在する。それらは六十六部廻国供養塔1基、無縫塔1基、不明1基である。現在、周辺の道などの管理は付近に在住する小倉務さん、日野正さんが草刈りや掃除等を行い、墓前に榊（さかき）などを供えている。2017年5月8日に小野敏信、橋本広綱（入野福祉館）、遠部慎で行った調査および記録を基にした。なお、六十六部廻国供養塔を含む考古学的な検討は別稿を予定している。



写真1 六十六部廻国供養塔



写真2 無縫塔類

六十六部廻国供養塔 自然石を利用し、結晶片岩製。摩耗しやや角がとれているが、周辺の河川敷に類似するものは確認できない。正面に「天下泰平九州筑後久留米 奉納神社佛閣日本廻國供養塔 日月清明 照空光嚴大徳」右側面に「文化八乙酉七月」背面に「施主同行妻さよ 先祖代々 同娘とも」とある（写真1）。

無縫塔 花崗岩製。やや長めの紀年銘については痕跡があるものの、現段階では読み取れない（写真2）。

不明 花崗岩製？。2破片あり、接合しない。紀年銘は読み取れないが、1つは地蔵の可能性が高い。

墓地 コンクリートで区画された墓地の基礎（約 3.2m 四方、高さ 0.5m）が六十六部廻国供養塔や無縫塔の東側に存在する。

樹木 スギが4本、イチョウ1本などが植えられている。直径 50cm 以上の大木で、樹齢ははっきりしないが、「年古りた十数本の杉の群立ちがあり」（西口 2011）との記録がある。

六十六部廻国供養塔に紀年銘は、文化八乙酉七月とあり、1826年に同行した「妻さと」「同娘とし」によって、建立されたものと考えられる。九州筑後久留米がその出身地である可能性が高い。無縫塔については、近世以降の所産と判断しておきたい。

六十六部廻国行者と遍路の関係については、武田和昭(2012)によって整理されているが、札所の付近に数多く存在することが多い。しかしながら、久万高原町内の六十六部廻国供養塔は、ほとんど把握されておらず(小嶋2004、武田2012)、不明な部分が少なくない。『石の民俗文化財』(久万高原町教育委員会編2012)によると、本研究でふれた六部堂のほか、下畑野川河合(弘化2年:1845年)、二名森田大師堂(安政2年:1855年)、菅生山(文政11年:1828)に存在する。また、大宝寺参道には、宝永3(1706)年の例も存在する(長曾我部・押川1998、2004)。1826(文化8)年に造立された六十六部廻国供養塔の例は、19世紀段階のものとしては、町内では古い段階の資料と位置付けられる。

「奉納神社佛閣」という紀銘も、小嶋(2004)による集成を参考にすると、17世紀から存在し、全国的な状況とも矛盾しない。こうしたことから、山内(1995)の指摘通り、この六十六部廻国供養塔は現位置を保っている可能性はきわめて高い。

3. 六十六部廻国供養塔にまつわる聞き取り調査

六部堂周辺での民話はほとんどなく、『久万の民俗』に記録されている「六部堂の六ノ丞」という伝説がある。六ノ丞という猟師が山ん爺と山姥を八幡大菩薩の弾で退治し、六の丞の墓が六部堂にある、という。周辺の榎ノ木でも類似した民話が採集されており、三の丞という猟師が山姥を退治し、三の丞の墓があるという(西村ほか1982)。

小倉務(1932(昭和7)年生まれ)は、樅ノ木の出身で、渡部金物店(日野ノボル)が転出した跡地に1958(昭和33)年に移転してきた。そのため、六部堂の祭りについては、断片的な記憶ではあるものの、聞き取り調査を行った。なお聞き取りの記録は、小倉敦夫(元久万高原町文化財審議委員)、小野敏信、小田眞一(久万高原町文化財審議委員)、遠部慎で、2018年6月12日、8月18日に現地で行ったものに、後日の聞き取りを加えて、整理したものである(写真3)。



写真3 聞き取りの様子

六十六部廻国供養塔 位の高い人のものだと年長者から聞いている。五輪さん(無縫塔をさす)は、えらい人の墓だと。六十六部廻国供養塔は、1965(昭和40)年頃ひっく

りかえったため、石を直した。木の祠は1965（昭和40）年頃、日野テルコ（金物店の渡部さんの姉）が、親族が元気になるようにと、願掛けの祠を設置した（註2）。1995年に発行された『土佐街道三坂越』には完全な形の写真が確認される。

相撲 六十六部廻国供養塔前の田んぼで奉納相撲をしていた（写真4）。秋10月上旬、稲刈りの終わった田圃で行っていた。幟（はた）が2本たっていた。小倉務は1939（昭和14）年当時明神小学校1年生で参加した。記憶では1940（昭和15）年にはやっておらず、戦後にも復活しなかった、と思う。賞品は鉛筆で、優勝者は2本で、自分（小倉）は1本だった（註3）。明神地区のあちこちの集落の奉納相撲に行っていた（註4）。六十六部堂での奉納相撲には20-30人の観衆が集まり、大人の相撲もあった。



写真4 相撲をとった場所（後ろの家の右林が、お助小屋があった場所）

樹木 聞いた記憶では大きなマツ（1本）がかつてはあったと聞くが、枯れたか何かで、かわりにスギを植えた。詳しい植栽時期はわからない。

墓地 山之内トシミチさんの叔父クニオさんが、中国の方から帰ってきて、昭和15年頃にコンクリートで区画した墓地をつくった（写真5）。戦後に、松山の方に転出した。

小屋 川をはさんだ土佐街道（杉の生えたあたり）にへんろ（お助）小屋があった（写真4）。木を立てて藁ぐろをつくったり、物置小屋をたてる。遍路が来ると、日野ノボルの姉シカさんが接待をしていた。2人くらいで。病人とか弱ったお遍路さんが数日で回

復したら三坂まで送っていた。自分が小学生前になる前に小屋で亡くなり土葬されたお遍路さんがいた。樺ノ木集落の墓地に仮埋葬していたが、後日縁者が引き取りに来たのを見た。腐臭がすごかった記憶がある。

以上の状況から、六十六部廻国供養塔が信仰の対象となっていること、関連するものとして、奉納相撲が行われていたことが伺われる。また、六十六部廻国供養塔は土佐街道（遍路道）の側であり、この周辺の人々（特に日野家）が関与していたことが伺われる。



写真5 コンクリート基礎（墓地）

4. 考察

現地の石造物の調査と、小倉務による聞き取り調査を基に、大きく墓域・信仰と習俗に事象を分離し、それらを時系列にまとめると以下のように整理できる（表1）。網掛け部は不確定の部分を含むが、終焉の時期については聞き取り状況から、その下限を把握することができる。

墓域としては、19世紀初頭からであるが、そこに祠などの新たな信仰が追加されていった可能性が高い。山内家の墓の造立が1940年頃に行われたことで墓域としての性格が強くなった可能性があるが、その遠因としては戦争に伴って、奉納相撲がなくなったことも理由の1つであろう。

かつて、奉納相撲が全国で行われていたことは知られている。久万高原町でも各地に存在していたが、今回の聞き取りでは、戦争を契機として終焉を迎えた可能性が高い。例えば、畑野川上田組弥陀寺では旧8月16日が縁日で相撲が賑わっていたが昭和初めころから青年が陸海空軍に志願するようになり、「青年が少なくなった昭和8年頃に、永い伝統の相撲も中止することになった」（久万町教育委員会1985：106）とある。

小倉の聞き取り（記憶）からは不明であるが、スギやイチョウも明らかに樹齢5、60年以上はあり、伊藤（1973）の記述にも、「年古りた十数本の杉の群れ立ちあがり」とある。伊藤の記述が1970年代であることから、小倉の幼少期ないしはそれよりも古い時期にマツからスギへの転換がはかられたと判断しておきたい。奉納相撲や、お助小屋の成立がどこまで遡るかは不明であるが、お助小屋はともかく、供養塔の記念銘から、マツの植樹や奉納相撲が年代的に1826年を遡る可能性は低い。現在の地名「六部堂」の成立についても、この六十六部廻国供養塔が1つの契機となっていることは指摘されているが（山之内1974）、六十六部廻国供養塔は設立して以来一貫して存在しており、

この六部堂地域に大きな意味を有していることがわかる。

戦前に多くの習俗はなくなっているものの、祠を 1965 年頃に新たに設置しており、信仰の対象として利用されていたことは、集合的記憶の観点からも大変興味深いものがある。

表 1 六部堂の歴史的環境（網掛け部は不確定な要素を含む）

年代	墓域・信仰			山内家	習俗			備考
	供養塔	坊主墓	祠		樹木	相撲	小屋	
1811年	設立				マツ			
明治					マツ			
大正					マツ			
1939年					マツ	終焉		イチョウ?
1940年頃					スギ			
1965年頃	修復				スギ			
現在					スギ			

5. まとめ

愛媛県下の六十六部廻国供養塔の様相を読み解くうえで、久万高原町域の基礎的な研究を構築することは急務である。本作業では、六部堂に所在する六十六部廻国供養塔を中心とした歴史的環境についてフィールドワークを中心とした、考古学的調査および、民俗学的な聞き取り調査に基づいて復元した。その結果、中予地方山間部に位置する六部堂の歴史的変遷について、大まかに明らかにすることが出来た。様々な習俗が失われていく中、一貫して樹立していた六十六部廻国供養塔が本地域でシンボリックな役割を果たしていたことは想像に難しくない。しかしながら、地名として成立したのは山ノ内（1974）の指摘する通り 19 世紀以降と考えられ、きわめて新しい伝統ととらえることもまた可能であろう。

また、これまで伊藤（1973a）や山内（1995）の議論に代表されるように、六部堂が土佐街道なのか否かで議論が行われてきたが、遍路小屋とも呼ばれるお助小屋の存在からは、単純に区分することの困難さを示している。ただし、この小屋もまた現在までは伝わっておらず、本研究で明らかにし得た意義の 1 つともいえよう。

今、筆者が生活している山村の六十六部廻国供養塔という、ごくふつうの町の題材を通じて（玉井 2009）、そこに生きてきた人々にまつわる具体的な歴史的環境を復元してみた。200 年という時間の中で、移り行く景観とあわせて習俗を整理した結果、六十六部廻国供養塔を取り巻く歴史的環境が連綿と続いていることが、読者に伝えることが出来たのであれば、望外の喜びである。それでも、この 200 年に満たない歴史の中でも今

や忘れられつつある情報が多く、その記憶の再構築を六十六部廻国供養塔に期待するのは、限界集落ともいえる本地域では無謀な願いであろうか。歴史的環境で大切なのは単なる景観ではなく、私たちのアイデンティティ形成のよりどころとなる、今という社会が蓄積してきた経験である（片桐 2000）、という指摘がある。

そのようにとらえると、この六十六部廻国供養塔が、この地域の地名である「六部堂」の由来であるとともに、短いとはいえ 200 年という経験が「六部堂」には込められており、今なお地域名称の根拠として存続している。『街道の日本史 46』において、坂東梅生は「松山札ノ辻より六里の東明神あたりは、鎮守の森や民家のたたずまいに昔さながらに農山村の景観が残り、旧街道と調和して旅情を感じさせてくれる」（坂東 2005:41）と述べている。この景観は誰が維持しているのだろうか。

久万高原のような山間部においては、片桐新自（2000）が指摘するような経験の多くは、第一次産業によって支えられており、それが終焉を迎えれば、本研究で紹介した六十六部廻国供養塔でさえ、ありふれた普通の存在以下となり、持続可能な存在でなくなってしまうだろう。聞き取りを終え、本稿の大半を書き上げた 2019 年段階には水田の猪対策の金属ネットが設置され、六部堂廻国供養塔へのアクセスは困難な状態になってきている。そのような現状だからこそ、こうした景観を今まで伝えてきた地域の方々の日々の努力に対し、心から敬意を表し、記録としての本稿を終えることにしたい。

【註】

（註 1）1762 年に執筆されたとされる『豫陽郡郷里諺集』に「良（うしとら）の角に法納所とて六十六部経を納ると云、惣じて日本國中に納所を経の森と云」（曾我 1924:63）とある。

（註 2）昭和 40 年代とまでしかわからなかった。

（註 3）奉納相撲は子供のものととも、大人のものもあった。小田眞一の記憶では、大人の商品は酒、八木、横泊では子供の賞品は御幣であった。

（註 4）周辺でも、観音さん（横通）、金毘羅さん（本組）、きのみやさん（井組）など、奉納相撲が盛んであった。

【引用文献】

- 伊藤義一，1973a，「埋れた土佐道」『伊予史談』伊予史談会，207・208:39-55.
伊藤義一，1973b，「埋れた土佐道・その後」『伊予史談』伊予史談会，209:31-34.
稲田道彦，2013，「日本廻国六十六部と四国遍路——浄慶の納経帳から」『香川大学経済論叢』86(2):77-114.
片桐新自，2000，「歴史的環境へのアプローチ」片桐新自編『歴史的環境の社会学』新曜社，1-23.
喜代吉栄徳，2002，「回国碑の謎（7）」『四国辺路研究』海王舎，19:59-60.

- 久万町教育委員会, 1985, 『久万の伝説』久万町教育委員会.
- 久万町教育委員会, 2003, 「六十六部回国碑」『久万高原 石の民俗文化財』久万町教育委員会, 80.
- 久万高原町教育委員会編, 2012, 『石の民俗文化財』久万高原町教育委員会.
- 久万高原遊山会, 2011, 「街道の確定と現状」『歴史の道調査報告書 土佐街道（三坂越え）』久万高原町教育委員会, 15-19.
- 小嶋博己, 2004, 『廻国供養塔データベースの構築と分析』2001-2002年度科学研究費補助金研究成果報告書(13610369), ノートルダム清心女子大学文学部.
- 曾我鍛, 1924, 『豫陽叢書第一巻』愛媛青年処女協会.
- 武田和昭, 2012, 『四国辺路の形成過程』岩田書店.
- 玉井和史, 2009, 「ふつうの町の景観はなぜかけがえのないものなのか——その社会的な説明と背景」『都市計画』日本都市計画学会, 277: 31-34.
- 長曾我部光義・押川周弘, 1998, 『石に聴く 出雲・美作・四国の旅で石に聴く』30, 私家版.
- 長曾我部光義・押川周弘, 2004, 『六十六部廻国供養塔——「石に聴く」宮崎県の石塔探訪記』岩田書店.
- 西海賢二, 1987, 「お廻国さま——異人歓待と忌避」『生活の中の行道——石鎚信仰の深層』福武書店, 72-84.
- 西口武志, 2011, 「官道と土佐街道」『久万山物語』久万高原町教育委員会, 83-114.
- 西村聡太・荒木理恵子・山下章之, 1982, 「伝説」北九州大学民俗研究会編『久万の民俗』北九州大学民俗研究会, 212-233.
- 野口光敏, 1972, 「交通」愛媛県教育委員会編『上浮穴地域民俗資料調査報告書』愛媛県教育委員会, 21-23.
- 坂東梅生, 2005, 「土佐街道（三坂越え）」川岡勉・内田九州男編『街道の日本史 46 伊予松山と宇和島道』吉川弘文館, 38-43.
- 山内譲・水田敏廣・崎山普史・高橋友鬼・伊豫田孝幸, 1995, 「街道の確定と現状」『愛媛県歴史の道調査報告書第2集 土佐街道三坂越え』愛媛県教育委員会, 13-37.
- 山之内肇, 1974, 「旧久万山街道を行く」『愛媛の文化 14』愛媛県文化財保護協会, 23-26.
- 和田純一, 1979, 「久万の「遍路道」とその周辺」『ふるさと久万』ふるさと久万編集委員会, 19: 24-35.

図の出典

- 図1. 表1 筆者作成
写真1～5 筆者撮影

謝辞

本稿作成にあたり、遺跡発行会、犬島貝塚調査保護プロジェクトチーム、愛媛県立図書館、遺跡発行会、久万考現塾、小嶋博己、柴田昌児、松田朝由、山口早苗の諸先生、諸氏には文献および情報の収集にあたり、御協力、御教示を賜った。末筆ながら、聞き取りに協力いただいた方々に謝意を申し上げたい。また本文中で敬称等は省略した。御寛恕願いたい。なお、本研究には「基盤研究(B)西日本最高地点に立地する山稜の弥生遺跡群に関する実証的研究」18H00737 の研究成果を含む。

本稿校正中に今福利恵氏の訃報に接した。民俗学の論文を書き始め、少しずつ形にでき、出来たものをお渡しするといろいろとご助言をいただいた。冥福を心より祈りたい。

【編集後記】『現象と秩序』第13号をお届けします。

このコロナ禍の時代に、人文・社会科学は何ができるのでしょうか。この問いに有効に答える論文に第一論文（加戸論文）はなっていると思います。ウイルスという、私たち人間を寄生対象として必要としながら、その一方で苦しめる存在は、その寄生という側面に注目するならば、人間と環境の共生メカニズムの一部にすぎません。したがって、共生でありながらも宿主（の一部）を殺害する存在であるというこの理不尽さには、既視感があります。アトピー性皮膚炎に関していえば、「かゆみ」というマイナス事象を、搔くことに伴う「喜び」は、逃れがたいほど魅力的で嗜癖に至ります。このメカニズムの合理性が、嗜癖一般の合理性とどの程度同じでどの程度違うのか、是非本文をご覧ください。人文社会科学の論考は、それを読んだからといって問題が解決する訳ではありませんが、理解はできるようになります。理解すれば受入れが可能になります。ここに、人文社会科学の価値があるのでしょうか。

第二論文は、医療考古学で著名な遠部氏のフィールドワーク論文です。本誌はハイブリッド雑誌なので、紙版とどうじに、Web版も同時公開されています。Web版ではぜひとも写真の美しさをご堪能ください。

第三論文は、音楽療法特集の続編的論考です。一つの雑誌が、ある思考を順々に深めていく論考を継続して掲載していくならば、そこに、学術コミュニティが発生すると信じております。生活社会学の論文としても秀逸です。ご感想など頂ければ幸いです。

第四論文は、NHKではありませんが映像の世紀である20世紀を社会学的に分析しようとするものです。ビデオ関連論文が大量に載っている本誌らしい論考といえるでしょう。

最後の翻訳とその解説は、スポーツ社会学の論考であるとともに、障害社会学的研究でもある論考です。また、東京パラリンピックとの関係を考えれば、時事評論的な論考ともいえるでしょう。したがって、こちらについてもご感想など頂ければ幸いです。

ご感想・ご意見は、企画編集室宛に電子メールで頂戴できると幸いです。99%即日でお返事を差し上げます。どうぞよろしく願いいたします。（Y.K.）

『現象と秩序』編集委員会（2020年度）

委員長：堀田裕子(愛知学泉大学)、委員：檜田美雄(神戸市看護大学)、中塚朋子(就実大学)
編集幹事：尾崎友祐(神戸市外国語大学)、編集協力・印刷協力：村中淑子(桃山学院大学)

『現象と秩序』第13号 2020年 10月31日発行

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 檜田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (檜田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>